

# 国語科教員と文学研究者の協働

——小野小町「思ひつつ」歌の授業実践をめぐって——

井浪 真吾  
有馬 義貴

## 1 課題の共有

現行学習指導要領、特に高等学校のそれに至る改訂をめぐる動きの中で特筆すべきことの一つは、文学研究者から文学教育に関する多くの声が上がったことである。日本古典文学研究の領域も例にもれず、様々な学会や研究会でシンポジウムなどが組まれた<sup>①</sup>。そこで発表されたものの多くは原稿化され、目にすることができるようになっていく。

二〇二一年から年次進行で実施され、選択科目の実施も行われるようになった二〇二三年現在、それらの声はいささかトーンダウンしたように思われる<sup>②</sup>。完全実施を迎える次年度に向け、現在は静観しているといったところであろうか。しかし、大きな変革がも

たらされ、それへの対応に追われている国語教室の生徒や教員のことを考えると、静観ばかりもしては行かない。

では何ができるのか。前述したシンポジウムなどでは文学研究者や国語教育研究者、国語科教員など様々な立場の人を交えた議論の場が設けられていた。しかしその後、例えば登壇者同士で協働して何か作り上げるといった試みは多くないように見える。シンポジウムで議論の場を設けること自体が協働であり創造であると言われればそれまでである。ただ、誤解を恐れず言えば、各々のシンポジウムで達成されたことが、問題の共有や各々の立場の違いを再認識することにとどまってしまうのであれば、それはスタート地点に立っただけのことである。この先に、何を生みだしていくのが大事なのではないだろうか。

そこで、二〇二〇年度中古文学会秋季大会シンポジウム「これからの古典教育を考える」の登壇者で、当時中等教育の国語科教員であった井浪と、同シンポジウムのコーディネーター・司会で、古典

文学研究者である有馬とて協働して授業を創造し、実践することにした<sup>(3)</sup>。以下、その具体について述べていく。なお、第1節から第4節までは井浪、第5節は有馬による。

(井浪)

## 2 授業構想

授業構想に際しては、井浪と有馬とで議論をしながら行つたのが実際ではあるが、本稿では、井浪が有馬の論考を読み、どう授業構想の手がかりを得たのかというかたちで記していく。

有馬は中学校の和歌教材を取り上げ、国語教室における和歌学習について次のように提案している。

中学校の教科書で取り上げられるのは基本的に『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』であるが、いずれも『○○集』とある通り、多数の和歌を集めることによって成立したものなのであり、さらに言えば、撰集、すなわち既存の和歌を選び集めて配列するといった編集を経て、新たに生み出された文化的産物なのである。和歌の学習は、それぞれの歌に詠まれた心情や情景などを捉えるといった、一首ごとの鑑賞が中心になることが多いように思われる。勿論、それはそれで意義の認められるところであるが、一方で、それらの和歌が収められている歌集という媒体についても、和歌という「言語文化」の享受・継承・発展の一つの形として、注目に値するものなのではないだろ

うか。<sup>(4)</sup>

和歌学習に関する授業実践報告や提言などは、そのレトリックや〈心〉に焦点を当て、生徒がその理解を深めることを目標とするものが大半である。他にも短歌創作や歌物語創作などの創作活動を通して、生徒がレトリックや〈心〉の理解を深めたり、活用したりすることを目的とする実践や提言などがある。いずれにせよ「一首ごとの鑑賞」を中心に据えており<sup>(5)</sup>、和歌学習の状況は有馬の述べる通りである。

こうした学習は有馬も述べる通り、「それはそれで意義の認められる」ものである。その上で有馬は、ある一首がどのような歌集にどのようなかたちで収録されているのかに注目することで、その一首をどのように享受、継承しようとしているのかを窺うことができる故、こうした視点をも和歌学習に取り入れることができるのではないかと述べるのである。このような点において、有馬の論は和歌学習の視点の転換を促すものである。

また、どのような歌集のどの巻に収録されてどう配列されているのかということ以外にも、詠み手が記されていたり、詞書や注が付されていたりと、一首をめぐる多様なパラテキストが存在する。文学研究者は、「一首ごとの鑑賞」を行う際にこうしたパラテキストを参照しないことはないだろう。このことを、有馬は別のところで小野小町「思ひつつ」歌を例に採って、次のように示唆している。

あらためて当該歌を見返してみると、和歌の本文のみからでは、ここに詠まれているのが恋慕の情だと断定することはできないのではないか、という疑問が生じてくる。誤解のないように断っておくが、当該歌は恋歌ではない、などと主張しようというわけではない。だが、「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」という本文のみを見る限りでは、「思ひつつ」が恋慕の情ではない可能性、「人」が恋の相手ではない可能性を完全には否定できないのも確かであろう。<sup>(6)</sup>

さて、部立の情報から恋歌という限定までではきたとして、当該歌にはなおも不明な点が残っている。どのような段階の恋なのか、相手とはどのような関係なのか、といった点である。なかなか逢うことのかなわぬ相手への恋慕の情らしいことはわかるが、その相手と既に深い関係になっているのか否か、といったことは、やはり和歌の本文のみからでは判断しきれない。その詠歌事情があらためて気になってくるところである。<sup>(7)</sup>

当該歌が恋歌であること、また恋歌であるとしてもそれがどのような段階の恋の状況を詠んでいるのかは、本文のみをみる限りでは分からないはずであるという。そこで収録されている歌集の部立や詞書、和歌の配列などにも注意を向ける必要があることが述べられる。当該歌で言えば、収録されている『古今和歌集』の部立（恋歌二）に注目することで恋歌であることを、和歌の配列に注目することで

まだ相手と深い関係になっていない段階の恋歌であることを、それぞれ示すことが可能になるということである。更に、この前段階として翻刻や校訂などを加えれば、古典文学研究者のテキストの読み方に一層迫ることになるだろう。

こうした古典文学研究者の営為そのものをも古典の授業に生かすことができないか。有馬の言葉を借りて言い換えれば、古典文学研究者の営為を古典の授業に持ち込むことで、テキストを通して「自分たちの「生きる」「社会・世界」について知り、考える」<sup>(8)</sup>、その「知り方」や「考え方」を生徒が学ぶ機会を設けることができるのではないか、ということである。そしてこれは石井英真が次のように言う「真正の学習」の議論と接続することが可能になると思われる。

教科の知識・技能が日常生活で活きることを実感することのみならず、知的な発見や創造の面白さにふれることも、知が生み出される現場の人間臭い活動のリアルを経験するものであるならば、それは学び手の視野や世界観（生き方の幅）を広げゆさぶりに豊かにするような「真正の学習」となりえます。

よって、教科における「真正の学習」の追求は、「教科の内容を学ぶ(learn about a subject)」授業と対比されるところの、「教科する(do a subject)」授業（知識・技能が実生活で生かされている場面や、その領域の専門家が知を探究する過程を追体験し、「教科の本質」をとともに「深め合う」授業）を創

造することと理解すべきでしょう。(9)

これまでも古典文学研究の成果を生かした教材研究や教材開発、授業実践の提案や報告が多く為されてきた。稿者もそれに学びながら、ささやかながら発表を行ってきた。しかし、自戒も込めて語弊を恐れずに言えば、これらは古典文学研究の成果を教材の問題としてしか扱えていなかった。加えて、古典文学研究が明らかにしてきた言語文化の豊穡さを単純化し、テキストの物語内容のみで古典教育における教材価値を議論しようとする、物語内容の古さ故にすぐに古典不要論の議論に接続されてしまう。このことは高校生たちの議論が教えてくれよう<sup>(10)</sup>。

しかし古典文学研究の論考から読み取れるのはテキストの物語内容に関することだけではない。テキストの物語言説や物語行為に関してはもちろんのこと、それらを明らかにしようとする研究者の営為そのものの豊かさも論考から読み取ることができる。こうした古典文学研究者の豊かな営為をも古典の授業に持ち込むことで古典の学びをより豊かに深くできるのではないだろうか。そしてこれを通して、古典教育の議論を更新することが可能となるのではないだろうか。有馬の論考を読みながらこのようなことを実感した。そしてこの実感をもとに授業づくりに取り組んだ。

なお、有馬の論考は、本稿で取り上げた部分以外では、「思ひつつ」歌をめぐる言語文化の豊穡さと生徒が「生きる」「社会・世界」との接点を探っており、古典文学研究が明らかにしてきた言語文化

の豊穡さと生徒の生きる現在との接点を探ろうとする際の参考になる。参看されたい。  
(井浪)

### 3 授業の実際

前節で述べたような経緯で、二〇二一年二月に井浪の当時の勤務校であった奈良女子大学附属中等教育学校の中学三年生を対象として、全二時間の授業を計画し実践した。また、井浪が現在の勤務校に所属が変わってから、岡山理科大学一年生に向けて一コマ90分の授業で実践したり、高校一年生や高校二年生を対象とした出張講義で実践したりと、合計で四回の実践を行った。以下では、この四回の実践をもとに、「言語文化」における実践として、その実際について記す。なお、発問や生徒の活動に関しては井浪のみで計画し実践した。

#### (1) 単元目標

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解することができる。「知識及び技能」(3)ウ

・作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈することができる。「思考力・表現力・判断力等」B(1)イ

・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書

に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。「学びに向かう力、人間性等」

(2) 単元の流れ (全約二時間<sup>①</sup>)

(第一時)

① 「思ひつつ」歌を翻刻する。

② 「思ひつつ」歌を現代語訳する。

(第二時)

③ 『古今和歌集』「恋歌」の配列意識を捉える。

④ 「思ひつつ」歌を解釈する。

⑤ 『古今和歌集』と類似するものを現代のものから探る。

①～⑤について補足する。

①はくずし字で書かれた「思ひつつ」歌を翻刻する活動である。

「古今和歌集巻第十二／恋歌二／題しらす 小野小町／思ひつゝ、ぬれはや人のみえつらむ夢としりせはさめさらましを」とくずし字で書かれた画像<sup>②</sup>を示し、文学通信のホームページで公開されている「くずし字一覧表」<sup>③</sup>も併せて示し、翻刻を追体験してもらった。ここでは、翻刻をできるようにすることを目的としているのではない。くずし字がもつ、生徒の学習意欲を喚起する力<sup>④</sup>を利用し、生徒たちにこれからの学習に興味をもってもらうことをねらった。生徒たちは分からないながら級友と相談したり「くずし字一覧

表」を参照したり、過去の学習体験を振り返ったりしながら、翻刻活動に取り組んでいた。

②は「思ひつつ」歌を逐語的に現代語訳する活動である。中学生を対象とした際は、適宜生徒に聞きながら最終的には教師から現代語訳を示した。高校生や大学生を対象とした際は、助詞や助動詞に注意を向けながら、適宜使用している教科書に付された助詞や助動詞の一覧表を参照しながら現代語訳を作っていた。但し、ここでせっかく喚起した生徒の学習意欲が減退しないように、生徒や学生の状況を見ながら、長い時間をかけないように心がけた。それでも、現在の原因推量である「らむ」や反実仮想の「まし」は少し時間をかけて復習したり解説したりした。

そして逐語的な現代語訳が出来上がった後、「この歌はどのような思いを詠んだ歌なのか」という問いを発した。すると、生徒からは「恋の思い」という答えがすぐに出てきた。そのように答えた理由を聞くと、この歌は「夢に恋人が現れた場面を詠んだ歌だから」という答えが返ってきた。生徒や学生の物語体験から、「思い」、「人」、「夢」という言葉の繋がりで想起されるのは「自身が思いを寄せている恋人が夢に現れる」ということのものである。なお、高校生や大学生の中には当該歌を中学校在学中に学習した者もあり、その学習経験から答えていた生徒や学生もいた。そこで更に、「この歌には「人」とだけあって、「恋人」とは記されていないけど、「恋人」と確定して良いのか。他に根拠にできるところはないか」と問いを続けた。すると、翻刻した中に「恋歌二」と書かれていたこと

に気づき始め、近くにいる生徒や学生同士で教え合う姿が見られるようになった。ここまですが第一時である。

第二時に入り、「恋の思いを詠んだ歌」ということは分かったが、どのような段階の恋の思いを詠んだ歌なのか」と問いを發した。当該歌自体を読んで考えようとしていたが、次第に「恋二」と書いてあることに気づき、「恋二つてことは恋一とかもあるの?」、「恋一と恋二の違いはあるのかな?」といった声が生まれるようになり、パラテキストにも意を注ぐようになつた。

そこで③の活動に移った。まず『古今和歌集』の部立について、配列意識には言及せず、教師の方から簡単に解説をした。その後、「恋一」から「恋五」の配列意識を考える活動に入つた。ここでのねらいは、恋一から恋五の歌を抜粋して、これらに現代語訳を付して資料として配布し、「恋歌についてもおおよそ「萌芽」から「終焉」へという配列になつているとすれば」<sup>(15)</sup>と、有馬が『和歌文学大辞典』を引きながら述べていることに気づいてもらおうというものである。資料として提示したのは次の和歌である<sup>(16)</sup>。

(恋一)

四六 春日野の雪間をわけて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも

四七 山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ  
五三 明けたてば蟬のをりはへ鳴きくらし夜は螢の燃えこそわたれ

(恋二)

五二 思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

五三 うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき

五四 いとせて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞ着る  
五九 白玉と見えし涙も年経れば韓紅にうつろひにける

六五 命やは何ぞは露のあだものをあふにしかへば惜しからなくに

(恋三)

六〇 いたづらに行きては来ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ

六三 人知れぬわが通ひ路の関守は宵々ごとにうちも寝ななむ  
六四 しのめの別の別れを惜しみわれぞまづ鳥よりさきになきはじめつつ

六五 君によりわが名は花に春霞野にも山にも立ちみちにけり

(恋四)

六八 あひ見ずは恋しきこともなからまし音にぞ人を聞くべかりける

六九 かれはてむ後をば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな  
七四 形見こそ今はあたなれこれなくは忘るる時もあらましものを

(恋五)

六 花薄われこそ下に思ひしか穂に出でて人に結ばれにけり  
九 思ふとも離れなむ人をいかがせむあかず散りぬる花とこそ

見め

四 秋といへばよそこにぞ聞きしあだ人のわれを古せる名にこそ  
ありけれ

この資料を読みながら、ワークシートに恋一〜恋五にどのような段階の恋の歌が収録されていると考えられるのかを記してもらった。その幾つかを挙げてみる(恋一〜恋五は便宜上、(一)〜(五)とする)。

A (中学生) …(一)その人のことを知る、恋の始まり、(二)出会って片思い、(三)通い始める、恋仲、(四)通う間隔が広くなる、離れている、(五)通えなくなる、失恋(別れ)。

B (高校生) …(一)出会い、一目惚れ、(二)片思い、(三)両思い、(四)別れに近づく、(五)別れ、後悔。

C (大学生) …(一)季節の単語が入っていて情景が分かる、恋の始まり、(二)恋しい人を想って書いている、片思い、(三)会ったり帰ったりしている、(四)恋しい人と会ったことを後悔している、(五)浮気されている、飽きられてしまった。

以上のように、概ね「おおよそ「萌芽」から「終焉」へ」という配列になっていることを気づけていた。一方でCのように恋一を春の情景を詠む歌が収録された巻であることに注意を向ける生徒や学生

が複数いた。これは六、九が春の情景に寄せて恋の始まりを詠んだ歌であることに起因する。それでも最終的には「恋歌」であることを踏まえて、恋の萌芽の歌として捉えることができていた。

④は③を踏まえて、「思ひつつ」歌がどのような恋の段階の歌なのかを捉え、解釈することを求めた。これは読み取った配列意識を持ち込んで一首の解釈を行うという、解釈のレッスンとして行おうと考えていた。しかし、「思ひつつ」歌はどのような恋の段階の歌か」としか問わなかったため、「片思いの段階」、「稿者補…巻十二の」初めの方にあるので、「稿者補…相手のことが」気になりだしてすぐぐらいだと思つた」という解答になり、解釈のレッスンとまではいかなかった。③を踏まえて、自分なりの現代語訳を作ってもらうなどの創作活動を取り入れると、生徒も一層意欲的に取り組むことができたかもしれない。

⑤は『古今和歌集』に近いもの、似ていると考えられるものを生徒の身のまわりから探ってもらう活動である。ここでは有馬も論考の中で引いている小山順子の次のような言を参考にした。

歌が詠まれた最初の時がシングルカット版だとすれば、歌人の個人編集に収められるのがベストアルバム、他の歌人たちの和歌も収める歌集を編纂するのがコンピレーションアルバム。すべてが全く同じ形であるとは限らない。それぞれに少しずつバリエーションを変えて収められている場合があるのだ。<sup>17)</sup>

但し、有馬も小山の別の発言も参照しながら注意を促しているように、「音楽アルバムの類と歌集とを安易に同一視すべきではない」かもしれない。一方で、両者を結びつけることで古文テキストと生徒との距離を近づけるとともに、歌集という媒体や言語文化への理解を深めることが可能となろう。或いは歌集の配列意識を扱ったが故に、生徒や学生が同一視した現代の生徒や学生の身のまわりにある諸媒体の編纂行為（何を意図して並べているのか、配列されたものによってどのような文脈が生まれるのか、それによってある一部のものへの解釈がどのように変容し得るか、など）にも目を向けるようになるのではないだろうか。こうしたことをねらいとして、「現代に生きる皆さんの身の周りにある、『古今和歌集』に近いものを挙げてみましょう。その挙げたものと『古今和歌集』は、どのような点が似ているのかできるだけ詳しく書いてください」と、ワークシートへの記入を求めた。解答としては、音楽アルバムやプレイリスト、短編小説など想定されたものが多く挙げられた。代表的な解答は次のようなものである。

D・・・音楽アプリのプレイリストが少し似ているかなと思います。プレイリストも『古今和歌集』のようにテーマ別で分けられています。例えば、「元氣が出る曲」「2021年メドレー」「失恋ソング」など、違う人が作った曲をまとめている点が似ているかなと思いました。他にも、恋でいえば出会いの曲から別れ、失恋の曲など一つのストーリーになるように作られているのも

多いです。そういう点でも似ているのかなと思いました。

一方で、配列による文脈や物語の形成といった『古今和歌集』の編纂行為に注意を向け、現代の諸事象における編纂行為に言及する解答も見られた。いずれも中学生の解答である。

E・・・報道が近いと思う。現地で出来事だけでは出来事の全体はよく分からないが、複数の記者が関連する出来事取材して、伝えるために必要な情報を取り出してつなげることで、一つの報道として、記事になったり、テレビで伝えられたりしている。これは『古今和歌集』においては、歌を詠む人は自分の感情を伝えるために努力し、撰者は似たものを合わせてまとめて、より意味を持たせるという点で記者と編集者（デスク？）との関係に似ていると考えた。

F・・・少しこじつけになるが、「歴史」は古今和歌集に似ていると思った。古今和歌集の中の歌一つ一つにその当事者の考え方や周囲の環境についてが詠まれている。歴史はたくさん事象の連なりでできており、その中の一つの事象にも当事者の思想、周辺環境が大きく関わっている。次に古今和歌集は作者の違う歌を並べることでまるで一つの物語のようになっている。歴史は先に述べたようにたくさん事象が連なっていて「歴史」という物語になっている。以上二点が似ていると思った理由である。



G…ショッピングモールが似ていると思った。ショッピングモールには色々なジャンルのお店がたくさん集まっている点や、飲食店や服屋など、ジャンルごとにまとめられている点で似ているなと思った。また人から注目を浴びるよう、看板や中身が全然違う部分も、和歌の内容は似ているが意味や印象が違うという点と近いと思った。

前二つは言葉による編纂行為について、最後の一つはモノによる空間形成について言及したものである。プレイリストに言及した解答も含めて、ねらいとしていたことは一定程度達成されたと思われる。一方で、アルバムや短編小説を挙げた解答の中には、集成されたものとしてしか考えられていないようなものもあった。こうした解答をした生徒や学生は、⑤に至るまでの間の活動で何を読み取ろうとしているのかを見失ってしまっていた可能性がある。一人一人の生徒や学生への目配りが充分でなかったであろう。この点は本実践の課題である。

(井浪)

#### 4 授業の振り返り

本実践は、「言語文化」を念頭に置き、文学研究者の営み(翻刻、単語や文法の知識を持ち込んだ現代語訳、パラテキストへの注意とそれを踏まえた解釈)を生徒や学生に迫体験してもらいつつ、歌

集という媒体や言語文化への理解を深めてもらうことを目的とした実践であった。この授業を受けた生徒からは次のような感想が返ってきた。

H (中学生) …「思ひつつ」の歌の解釈では、原文のまま(稿者補…「原文ママ」と記していたが、誤解を避けるため、稿者が「原文のまま」と訂した)でそれを一から解いていくという初めての事にチャレンジしてみたが、最初は読めずとも、後で答えを知ってから見てみると、意外とびっくりすんなり分かった。また発展して古今和歌集についてやった時も、テーマごとにいろんな人から詠(稿者注…「歌」のこと)を集めて一つのストーリーにするといった、現代でもなかなか見ないような試みがこんな昔に行われていたのかと思うという面白い面白かった。一回、皆でこんな感じの連歌会みたいなのもやってみたい。

F (前節のFと同) …一つの和歌を見るだけでは文字になっていることから意味をとり、推測することができると、確実なものではない。しかし、歌集として一つの歌を見ることで、関連性からさらに解釈を深めることができた。どうして撰者は散らばっている歌の関連性を正しく見つけ、まとめることができているのかについては不思議な点である。

I (高校生) …ひらがなが自分の知らないものだった、文章

のつくりが今とちよつと違つていたりして読むのが大変だった。古今和歌集の恋歌が段階によつて分けられていることを知らなかったら小野小町の和歌がどういう解釈をするべきか分からなかったと思う。和歌のまとめられている巻の種類やならべられた順番によつて、編集した人の解釈までも何となく分かつてしまふというのが面白かつた。和歌をうたつた本人の気持ちは伝わっていないかもしれないけど、当時の人たちの考え方や感じ方を通して歌い手の気持ちを理解しようとするのが面白いと感じたし、楽しかつた。普段の授業とは違つた内容で楽しかつた。

これらの解答をみる限り、本実践のねらいとするところはある程度達成できたのではないかと思う。文学研究者の営みを追体験することとは、難しいと感じながらも少しずつ解明されていくことや新たに発見することの楽しさを知ることに関がつたようである。それだけではなく、編纂行為や歌集という媒体、言語文化に対する理解も深まつたように思われる。

一方で気になるのは、Ⅰの記述に見られる「普段の授業とは違つて」という点である。高校生には出張講義を行つたので、確かに「普段の授業」とは異なる。好意的に受けとめてくれているのも、「普段の授業」とは異なるからであろう。では、ここで生徒が言っている「普段の授業」とは何であろうか。

大学生に実践を行つた際、教育学部の学生でもあつたため、中高

生とは別に「今日の授業のように和歌を読むことは中高の授業でできると思いませんか？」と問い、その解答をワークシートに記入してもらつた。すると、「今日の授業は中高の授業には難しいと思います。最初に文法を教え始めないと、現代語訳をすることは難しいと考えたからです」、「中高の授業では、今日のようにスラスラとはできないと思うので、まずは文法をしつかりと習得させ、どのような意味になるのかも教えていくことが必要だと思いました」といつた解答が少なからず見受けられた。生徒や学生にとつての「普段の」古典の授業は、文法や単語を身につけ、現代語訳をするものという認識があるのではないだろうか。これはこれとして意義のないことではないが、生徒にとつて古典の授業が豊かなものになつていないことは確かであろう。引き続き、様々な立場の人と協働しながら、生徒にとつて古典の授業が豊かになるように努めたい。(井浪)

## 5 実践からの学び

「思ひつつ」歌をめぐる学習の提案は、井浪の著書<sup>(18)</sup>に触発されて、「古典教育と古典文学研究を架橋する」ということを意識しつつおこなつたものである。但し、拙稿の中でも述べたように<sup>(19)</sup>、「なおも理念や可能性を示すにとどまつている」ところがあり、「教育研究の知見や実践を踏まえた検討を加えて、建設的な議論へと繋げてい」く必要があるとも感じていた。本稿はまさしくその「実践を踏まえた検討」として位置づけられるものである。井浪の実践か

ら見えてきたことは少なくない。

例えば、第3節で示したように、『古今和歌集』の「配列意識」や、そのような歌集と「音楽アルバムやブレイリスト」などとの類似性への気づきは、活動や発問の組み方などにより、生徒から引き出しうるものであるということが明確になった。拙稿では、学習者の「既有知識や生活経験など」に基づく「類推」によるアプローチという方法<sup>20)</sup>には言及したものの<sup>21)</sup>、そのような「類推」に導くための具体的な手順などを提示してはいなかった。勿論、配列への意識が認められない解答もあつたことを本実践の課題として井浪が挙げるように、学習者によるところなどもあるとは思われるが、一つのモデルケースは示しえたといえよう。

ちなみに、拙稿における提案では、和歌のジェンダーをめぐる問題や、『古今和歌集』と『小町集』における「思ひつつ」歌の位置づけの違いといったことにも言及したが、今回の実践ではそれらは取り上げられていない。時数や学習目標に即した取捨選択、授業構想がなされた結果であり、当然のことではあるが、そのように、さまざまなアレンジがあつてよいのである。少しずれるところもあるかもしれないが、先に引用した小山順子の言葉を拝借すれば、「全く同じ形である」必要はなく、「バージョンを変えて」取り上げうるものとして、拙稿における提案はあり、本稿で示したような実践もその一つなのだといえよう。生徒の状況などを踏まえた適切なアレンジは、その生徒と時間や空間を共有する教員だからこそ可能なものとしてあるのだと思われる。

なお、①でおこなった翻刻の活動については、上述のこととは逆に、拙稿における提案にはなかったものを加えた形になっている。くずし字への着目については、古典の享受・継承に関する学習という観点からその意義に触れたことがあるが<sup>22)</sup>、なるほど、井浪が述べるように、「古典文学研究者の営為を古典の授業に持ち込む」という観点からは、生徒に「翻刻を追体験してもら」うということもありうるのだろう。和歌のように短いものは、そのような活動に適した教材（学習材）であるとも思われる。

さて、その「古典文学研究者の営為を古典の授業に持ち込む」という観点は、翻刻だけでなく、「単語や文法の知識を持ち込んでの現代語訳、パラテキストへの注意とそれを踏まえた解釈」（前節冒頭）にもあてはまるわけで、本実践全体のテーマとして位置づけられていたものである。研究の成果ばかりでなく、そこへ辿り着くための研究のプロセスにも、学習における有用性がある（あるいは、プロセス自体を研究成果の一部として意識すべきである）<sup>23)</sup>ということを、本実践は再認識させてくれた。

井浪は「文学研究が古典教育に「参与」「補充」することは、文学研究が「学問のプライベート化」「知的引きこもり」を脱却し、文学研究の更新にも繋がるのかもしれない」と述べるが<sup>24)</sup>、本実践は、最新の「文学研究が古典教育に「参与」する、そのあり方について考える手がかかりともなるのではないか。例えば、二〇二二年に刊行された論集『百人一首の現在』（中川博夫・田淵句美子・渡邊裕美子編、青簡舎）の「まえがき」には次のようにある。

このように、『百人一首』の撰者・成立をめぐることは、教育界やメディアの世界と、最先端の研究者との間には、認識のずれがあるように見える。これは、どの専門分野にも共通することであろうが、それを放置したままにしておくことは許されず、それを正すのは研究者の側の責任である。本書刊行の一つの意味はそこにある。

：（中略）：

現在まで『百人一首』定家撰が定説とされていたように、本書で示す説が新たに定説となっていくこと、あるいは定説の基盤となることを企図して本書は編まれたけれども、それらが定説化してゆく過程でなお、検証され批判され相対化されるべきである。

『百人一首』を藤原定家撰とする、これまでの「定説」を「正」そうとするものであり<sup>24</sup>、本稿でその詳細や「是非」<sup>25</sup>にまで踏み込むことはできないが、ここでは仮に、それが「新たに定説」化していった場合のことを考えてみたい。当然、教育の場でも、『百人一首』の撰者に関する説明についてあらためる必要が生じてくるだろうが、その時、一部文言を修正するというだけではなく、それまでなぜ定家撰とみなされてきたのか、また、その説をどのような理由、経緯であらためることになったのか、おおよそのところでも学ぶ機会を設定することへと繋がられないか。研究の成果による情報

の更新だけでなく、その更新のプロセスも学習の対象とすることができないだろうか。研究のプロセスについても多くの人々が知るところとなれば、それだけ多くの目で「検証され批判され相対化される」ことにも繋がりがえようし、ひいては「文学研究が「学問のプライベート化」「知的引きこもり」を脱却し」ていくことや、「文学研究の更新にも繋が」っていきうるように思われるのである。

但し、研究のプロセスを学習の対象にするとして、それを中等教育でどのように実現するのかというところ、すなわち、学習者の実態に即した具体的な授業構想、デザイン、アレンジなどにおいては、研究者による提言だけでなく、やはり中学校や高等学校の教員が有する知識や経験が必要不可欠なものとなってくるだろう。そこに本稿でも示したような協働の意義を認められるのではないだろうか。

『百人一首の現在』には、教科書調査官の平藤幸が執筆者の一人として名を連ねてはいるが、中学校や高等学校の教員という肩書きを示している執筆者は見当たらない。「架橋」的な発信は既になされているものといえようが、今後はさらに、（多様な「メディア」の活用もさることながら）教員と研究者による協働などが必要になってくるのではないだろうか<sup>26</sup>。

やや筆が滑ったところもあるが、以上のように、本稿は、実践報告としてばかりでなく、協働の一つの形を示した論考として読まれることをも意識したものであるという点、最後にあらためて強調しておきたい。メインタイトルを「国語科教員と文学研究者の協働」としたのはそれゆえである。前節の末尾で示したような、古典学習

の評価方法、大学入試問題のあり方などに関わる課題の検討においても、井浪が述べるように、「様々な立場の人と協働し」ていくことが必要であろう。「スタート地点に立つただけ」(第1節)で満足せず、私もまた、引き続き、「生徒にとって古典の授業が豊かになるように努めたい」。

(有馬)

注

(1) 井浪真吾「古典教育という営為——国語科教員の立場から——」(『中古文学』第一〇七号、中古文学会、二〇二二年五月)

\*で整理した。なお、オープンアクセス化されている論文・報告等については、末尾に\*を付して示すこととする。

(2) こうした声が皆無になつたわけではない。例えば、日本古典文学領域では、同志社大学古典教材開発研究センターの一連の活動が挙げられる。目立つような形で声が挙げられていた以前と比べると、ということである。

(3) なお、本稿とは別の実践も既に報告している。井浪真吾・有馬義貴「『翻訳』について「古文で考える」授業実践の試み——『源氏物語』『若紫』と現代語訳——」(『次世代教員養成センター研究紀要』第八号、奈良教育大学次世代教員養成センター、二〇二二年三月) \*。

(4) 有馬義貴「古典和歌学習における一視点——歌集という享受・継承の形への着目——」(『月刊国語教育研究』第五六五集、

日本国語教育学会、二〇一九年五月)、43頁。

(5) 本歌取りに関する和歌学習の際は、関係する複数の和歌を用いて、その対話のあり様などを捉えるのであろうが、それも本歌取りを用いている一首の理解を深めることが主たる目的であると考えられる。その点では、こうした学習も「一首ごとの鑑賞」を中心とする学習活動だと言える。

(6) 有馬義貴「小野小町「思ひつつ」歌をめぐる学習の可能性——「社会・世界」について知るための古典学習——」(『国文学研究』第一九五集、早稲田大学国文学会、二〇二二年十月) \*、26頁。

(7) 前掲注(6)、27頁。

(8) 有馬義貴「総括——教育全体の中で古典文学は何を担いうるか」(『中古文学』第一〇七号、中古文学会、二〇二二年五月) \*、47頁。

(9) 石井英真「授業づくりの深め方——「よい授業」をデザインするための5つのツボ——」(『ミネルヴァ書房、二〇二〇年)、55頁。

(10) 長谷川凜ほか「高校に古典は本当に必要なのか——高校生が高校生のために考えたシンポジウムのまとめ——」(『文学通信、二〇二一年)。本書第五部で編者の一人である仲島ひとみが高校生のディベートの論点を「リテラシー」、「コンテンツ」、「アイデンティティ」の三つの観点から整理している。このうち、コンテンツに関するディベートは明らかに否定派に分があるで

あろう。これは仲島のまとめから窺える。

- (11) 中学校での実践は65分×2コマ、高校生や大学生は90分×1コマ。

- (12) 広島大学図書館蔵『古今集』（函号：大図833）。画像は、国文学研究資料館の国書データベースを用いた（DOI：<https://doi.org/10.20730/100302202>）。

- (13) 文学通信リポジトリからダウンロードが可能。<https://reports.bungaku-report.com/ndocs/index.php>（二〇二四年一月二四日最終確認）。

- (14) 同志社大学古典教材開発研究センター、山田和人ほか編『未来を切り拓く古典教材——和本・くずし字でこんな授業ができる——』（文学通信、二〇二三年）。同書に収められている飯倉洋一「なぜ「くずし字教育」が必要なのか」を参照して、本稿でも「くずし字」という語を用いている。

- (15) 前掲注（6）、28頁。

- (16) 『古今和歌集』の本文と歌番号は高田祐彦訳注『新版古今和歌集』（角川学芸出版「角川ソフィア文庫」、二〇〇九年）。以下、同。

- (17) 小山順子『和歌のアルバム——藤原俊成 詠む・編む・変える』（平凡社、二〇一七年）、7頁。

- (18) 井浪真吾『古典教育と古典文学研究を架橋する 国語科教員 の古文教材化の手順』（文学通信、二〇二〇年）。

- (19) 前掲注（6）、35頁。

- (20) 前掲注（4）、44頁。「既有知識」「生活経験」「類推」は、鶴田清司「自分の既有知識・生活経験から類推するアクティブな学び」（『国語科教育』第81集、全国大学国語教育学会、二〇一七年三月）からの引用。

- (21) 有馬義貴「古典の享受・継承に関する学習——現行中学校教科書を中心に——」（『次世代教員養成センター研究紀要』第四号、奈良教育大学次世代教員養成センター、二〇一八年三月）。

- (22) 例えば、有馬義貴「大学入学以前と以後の古典学習」（『早稲田大学国語教育研究』第三五集、早稲田大学国語教育学会、二〇一五年三月）\*において、平安時代の物語文学作品のほとんどが作者不詳である中、『源氏物語』だけが紫式部と断定されていることに着目し、そこから物語文学作品の性格などを考えるという、大学における授業内容について、高等学校でも取り上げるのではないかと述べている。

- (23) 前掲注（1）、13頁。「参与」「補完」は、竹村信治「何を読むのか——教科書の古典「文学」——」（『日本文学』第六三巻第一号、日本文学協会、二〇一四年一月）\*から、また、「学問のプライベート化」「知的引きこもり」は、将基面貴巳「人文学としての日本研究をめぐる断想」（『日本研究』第五五集、国際日本文化研究センター、二〇一七年五月）\*からの引用。

- (24) 田渕句美子『百人一首』をゼロ時間へ——藤原定家が撰者ではないこと（『図書』第八八五号、岩波書店、二〇二二年九月）においても要説がなされている。また、最近、田渕句美子

『百人一首——編纂がひらく小宇宙』（岩波書店）『岩波新書』、二〇二四年）も刊行された。

- (25) 引用部分の末尾に「それらが定説化してゆく過程でなお、検証され批判され相対化されるべきである」と述べられているが、最近のものとしては、吉海直人「『百人一首』の未来——非定家撰説のは非を問う——」（『古代文学研究 第二次』第三二号、古代文学研究会、二〇二三年一〇月）\*がある。

- (26) 『百人一首』の撰者・成立の問題ばかりでなく、例えば小川剛生『兼好法師 徒然草に記されなかった真実』（中央公論新社）「中公新書」、二〇一七年）に示されるような、「吉田兼好」という称をめぐる問題などについても、同様のことがいえようか。

（岡山理科大学教育学部）

（本学国語教育講座）